

運用力を高める教室内活動のあり方

「何を行うか」から 「どのようにそれを行うか」へ

肥沼 則明

1 何が重要か

生徒の英語運用力を高めるためにどのような活動を授業中に行ったらよいかということについては、実に様々な実践例がこれまでに紹介されている。ただ、そのような個々の実践例が多ければ多いほど、自分を含めた一般的な英語教師はどの活動を自分の授業に取り入れたら、生徒の英語運用力が伸びるのかということがわからなくなってしまっているのではないだろうか。

筆者はここ数年、このことに関して、ある確信に似た結論に達している。それは、『何を行うか』はそれほど重要ではなく、『どのようにそれを行うか』が重要である」ということである。しかしそれは同時に、どのように行うかということをしつかりと押さえて実践しなければ、たとえどんなによいとされている活動でも効果はあがらないということでもある。

一方、ある活動を行ったときに、その活動がどれほど生徒の英語運用力向上に効果的に作用したかは、生徒がどれほど主体的かつ内容の濃い活動をしたかにかかっているとされている。与えられた活動をただ漫然と行うのと、自らの意志で積極的に取り組むのとでは、同じ作業内容の活動でも、結果として生徒が身につける力には差があるということである。

2 どのように行うか

では、「どのようにそれを行うか」とは具体的に

どのようなことを指すのか。ここでは、筆者及び同僚が長年実践してきているある活動を取り上げ、この視点でその活動を行うにあたっての留意点を議論することにする。

(1) 対象となる活動 What Am I?

この活動は、平成8年度から1年生後期に毎年行うことが現校のカリキュラムに位置づけられているものであるが、主な活動内容は次のとおりである。

- ・生徒全員が「私は誰でしょう?」というクイズを作成して出題し、残りの生徒が出題者に質問を投げかけながら答えを当てる。
- ・生徒は6~7人の班に分かれ、班員が質問したり答えを当てたりすると班に得点が与えられる。
- ・授業の最初の約10分間を使い、毎時間2名の生徒が出題する。

(2) 生徒の変化

17年にもわたる実践であるので、その間にはいくつかのバージョン・アップが図られているが、基本的な活動内容は変わっていない。しかし、ビデオに残っている新旧のバージョンを比べると、以前の生徒と現在の生徒とでは活動中の様子がまったくちがっているのである。以前のバージョンでは、活動そのものは成り立ってはいたものの、生徒の活動意欲はあまり見られなかった。

しかし、ある年を境にその状況が一変した。生徒の本活動に対する意欲が飛躍的に向上し、この活動がまるで生き物であるかのような生き生きとした活

動に進化したのである。

(3) 変化の要因

同じ教員が同じ活動を行っているのにもかかわらず、結果として表れている生徒の姿に劇的な変化が認められるのには、それなりの理由がある。それは次のようなことにまとめられる。

① ルールの変更

初期のバージョンでは、答えが当たってしまったらそこでおしまいというルールになっていたが、これが結果的に生徒の活動意欲の向上や活動内容の充実を阻害していることに気づいた。具体的には、出題者は答えを当てさせたくないで、返答内容を最小限にしようとして、発言量を制限してしまっていたことや、残りの生徒は答えに気づいた途端にそれ以上のことをしようとしなくなる、ということがわかったのである。

そこで、制限時間内はたとえ答えがわかっても質問し続けるというルールに変更したところ、出題者はそれまで以上に積極的な情報提供をしようとし始め、残りの生徒は答えを当てることよりも出題者とのQ&Aを楽しもうとして、より多くの質問をするようになったのである。

ゲーム性は生徒の活動意欲を高めるのに有効であるが、時にそれがその活動の達成目標を見失わせてしまうことがある。本活動は、適度なゲーム性を残しつつも、より生徒の知的関心を高めるための新ルールを得て、長期間にわたって生徒の活動意欲を維持できるものへと変貌をとげることができたのである。

② 演出の効果

初期のバージョンでは、活動の前後や活動中に何の演出もなかった。その結果、生徒は静まりかえった中で緊張感を感じながら活動していた。

そこで、活動の開始時と終了時に劇的な音楽を採用するとともに、教師がスポーツ番組のアナウンサーのような口調で活動を盛り上げるようにしたほか、制限時間内はタイマーとしての役割も持たせたBGMを流すようにした。

その結果、この活動は開始時から終了時まで独特の“劇的空間”となり、生徒はリラックスしたモードの中で極度の緊張感を持たずに参加できるようになって、毎時間この活動を楽しみにするようになったのである。

たのである。

生徒がある活動に積極的に取り組むかどうかは、実は活動中のちょっとした演出のちがいに影響されることが多い。それは、多くの優秀な実践家の授業を見ると共通項として浮かび上がってくる工夫でもある。

③ 事前指導の充実

初期のバージョンでは、毎時間の実施に対する煩雑さから、特に希望する生徒以外に事前指導は行っていなかったが、それは結果として生徒の準備不足や自信喪失を招いてしまっていた。

そこで、毎回の発表者2人を同時に指導することで指導時間の短縮を図りつつも、出題原稿のチェックやQ&Aのリハーサルを入念に行うようにしてみた。

その結果、生徒は以前よりも明らかに自信をもって発表するようになり、そうした個人の連続が結果として本活動のレベルを長期にわたって高く維持してくれるようになったのである。

生徒に活動の主体を預けるような活動を設定するときは、いかに生徒に活動内容を理解させ、自信を持って臨ませるかが重要である。特に、クラスメートの前で個人に発表させるような本活動においては、長期にわたって活動のレベルを維持・向上させるためにも欠かせないことである。

3 まとめ

生徒の運用力を高める教室内活動は多種多様なものがあり、これがよいというものはない。むしろ、極論すれば、生徒が自らの意志で活動し、一定量以上の発話量が保証されるような活動であれば、どのようなものでも構わない。しかし、教室内で数十名の生徒（しかも中学生という思春期の人間）を、一斉に動かさなければならない状況下においては、その生徒たちが本気で活動したくなるような“仕掛け”が必要となってくる。

どのような活動を行うにしても、中学生の精神的レディネスと集団をマネジメントすることを十分に考慮した、「どのようにそれを行うか」を工夫することが大切である。

(筑波大学附属中学校教諭 こいぬまのりあき)